

金沢文庫駅からの細い道を十数分歩くと、左手に称名寺の古びた赤門が見えてきた。ガンベラの朱色は風化して色が抜け、赤茶にくすんだ木肌が剥き出しになっていた。赤門をくぐり抜けると、真っすぐに延びた参道の両側には桜並木が並び、その先には風雨に晒されて黒ずんだ大きい仁王門が、土中から生えた古木のように立っていた。

怒ったような格好をした左右の仁王様に手を合わせ、奈津はその間をくぐり抜けて境内に入った。幼い頃、寺の仁王門を通り抜けるのは一種の恐怖だった。いつ後ろから「こら待て、奈津」と呼び止められ、仁王様の太い腕で襟首をつかまれないかと不安で胸がいっぱいだった。奈津がそれまでした悪戯や悪事を仁王様に大声で裁かれるのではないかと怯えていたのだ。

何事もなく仁王門を潜り抜けると、小山を背景にした金堂が姿を現した。本堂の前には大きな池が広がり、池は阿字ヶ池と呼ばれ、反橋と平橋を組み合わせた浄土世界を現わしているとのこと。鎌倉時代からの名刹で、浮世絵〈称名晩鐘〉にも描かれた寺であるが、今は人々から忘れさられているのか、かなり荒れているように見えた。

昭和十五年春、十河(そごう)奈津、十八歳。

有平棒(あるへいぼう)

~~~~~

【有平棒】

〔名〕(有平糖のような棒の意)理髪店の看板として用いられる赤白青のらせん模様の棒。古く西洋で理髪師を兼ねた医師の看板に用いられたものを転用したもの。明治初年頃、東京日本橋常盤橋門外に開店した理髪店が用い始め、一般化したという。

~~~~~

国道の右手の小高い丘が途切れる辺りで、国道は広い道路と交差していた。奈津は国道を右に折れてこの広い道路に入った。道路は国道よりもさらに広く、道の両側には桜の木が植えられ、桜並木は、ゆっくりとカーブしながら下る道路に沿って延びていた。並木道の桜の若葉は初夏の強い日差しを遮り、葉の間にはさくらんぼの緑色の小さな実が風に揺れていた。奈津は風に混じってくる潮の匂いをかすかに感じた。潮風は肌に心地好かった。

桜並木をそのまま進むと、道の両側に大きな門柱が見えた。左側の門柱の前には白い水兵服を着た衛兵が立っていた。衛兵は右手に小銃を持ち、休めの姿勢で前を向いていた。その格好は、午前中にお参りした称名寺の仁王像のように、訪問に来る人を威嚇しているようにも見えた。

門柱には横浜海軍航空隊と書かれた表札がはめられていた。奈津は海軍の航空隊を訪問するのは今日が初めてだった。

元横濱海軍航空隊 隊門。



花毛布

~~~~~

これは戦前の旅客船のサービスの一環として伝統的に伝えられている「花毛布」(飾り毛布)という折り方で折られたもので、数十種類の折りかたがあり、毎日客室係がベッドメイキングの際に造り上げて乗客を楽しませたそうです。

<https://cruisemans.com/b/punipcruises/8476>

~~~~~

働き始めて数カ月すると色々なことが分かってきた。航空技術廠では軍用機に関する研究、開発のみでなく航空機の製造も行われていた。彗星や銀河のような、既に実戦で使用されている飛行機の製造や改造だけでなく、これから実戦に投入する最新の航空機の研究開発も行われていた。

隣接する追浜には航空機製造工場と飛行場があり、新しく開発された新鋭機の試験飛行が行われることもあった。

東京湾の方に目をやると、海面に二式大艇がその巨体をさらし、陽の光を浴びてのんびりと浮かんでいた。

末永少佐も言っていたけれど、アメリカの最新技術は日本にまだないばかりだと。飛行機同士で会話ができる無線機、高度や位置の分かる高性能の電波探知機、一万メートルの高高度を飛行するには絶対に必要な酸素呼吸器や多段排気タービン、潜水艦を正確に探す音波探知機などは今の日本では研究開発段階みたい。アメリカやイギリスではそんな新技術で造られた飛行機や軍艦が次々と前線に送られているのよ。技術将校の人は血眼になって調べているわ」瑞穂は珍しく興奮していた。

[航空技廠に勤める女子4人が葉山の別荘\(財閥のお嬢様居住\)で夕食会に招待され、戦争について語り合う内容はなかなかいいと思う。](#)

「日本の軍隊は陸軍と海軍が、それぞれの目先の手柄を立てることばかり気にしている。戦争を勝利に導くことよりも、自分が戦功を挙げることに目がくらんでいるだけで、長期的な戦略はないみたいよ。互いに協力しあう組織的な戦略などなく、それぞれが目先の戦術的な勝利しか考えてない。あの人たちの脳みそは、戦国時代の、敵の大將首を狙っている足輕の段階から一歩も進歩していない」滝川は興奮して続けた。

...

「今の日本政府はどんな形でこの戦争終わらせようとしているのかは全く分からないし、そうする兆候もない。連合国が信頼を置けない日本と講和することはないと思うわ。首相が『建国2600年、我等は未だかつて戦いに敗れたことを知りません』と演説するのだから、負けることは全く想定していないのよね。負け始めるとどうするかについては何も考えていないと思うわ」滝川は確信しているように言った。

「いったいどうすればこの戦争を終わらせられるのかしら。滝沢さんは大学で歴史の研究をしていたのなら、何か知恵はないの」瑞穂が聞いた。

「前の欧州大戦をみると、現代の戦争は領土の一部だけを奪うような単純な武力衝突ではないわ。最後は市民も巻き込み、国民同士の殺戮の連鎖になる。そしてどちらかの国家が破滅するまでは戦争は終わらないみたい。どうしても終わらせさせるならば、政府転覆の事クーデターを起こすくらいかな」滝川の冷やかな答えに三人は驚き、互いの顔を見合わせた。

「奈津さんは黙って聞いているけれども、この戦争どう思っているの？」瑞穂が望みを繋ぐように聞いた。

奈津には世界の政治情勢はよく分からなかった。貿易業務に関わっていても世界情勢の一端を垣間見る程度の知識しかなかった。滝川や瑞穂に反論するどころか、自分もその意見に共感していることに気付いた。

「私思うの。戦争を指導する人たちは、戦争に巻き込まれる人たちのことは何も考えてい

ない気がするの。私にはそうしか思えない。戦争を始めたからには一致団結して勝つまで困難に耐え忍ばなければならないというばかりで、国民がどうなるかは聞いたことがない」奈津はポツリと言った。

・・・

「権力者にとっては、国を守るといっても、それは天皇を守ること。天皇制の国体を守るために、戦地で命を捨てて死んでこいと命令しているだけ。天皇自身を守るというよりも、天皇制を支える権力者として、自分たちの地位を守るために国民に命を投げだせと命じているだけなの。国民に対する思いやりなどはもともとないのよ。臣民と呼ばれる国民には人権はないのよ。日本国民は日本軍の捕虜か奴隷なの。外国に住んでいると日本のカラクリがよく分かるわ」滝川は厳しく言った。

・・・

「アメリカやイギリスの言い分が絶対正しいとは私も思わない。アメリカもハワイ王国の女王リリウオカラニを追い出してハワイを併合したし、フィリピンもスペインとの戦争で奪って植民地になっている。どちらも法律上は問題があると思うわ。アメリカだって日本が植民地を持つことに堂々と反対できるような立場でもないと思うの。でもアメリカやイギリスに反対されたというだけで戦争に突入する必要もなかったと思う。やはり、日本は牛の扱い方を知らなかったのね。あるいはまだ蛙なのに、自分も牛や象になったと思ったのね。それがこんな戦争をすることになった本当の理由かもしれない」瑞穂は心の曇りが晴れたように言った。

円海山に薪拾いに行った。

・・・

飛行機の群れは横須賀の海軍基地を攻撃に来たのだと奈津は思った。

しかしながら敵の編隊は横須賀の海軍基地上空を通り越して、野島と夏島の間の迫浜飛行場に向かって高度を下げ始めた。敵の飛行機は、一本の紐のように、連続した軌跡を描きながら迫浜飛行場に急降下し始めた。

迫浜飛行場の滑走路の周囲には、数十機の飛行機が並んでいた。滑走路から数機の日本の戦闘機が離陸するのが遠めに見えた。突然の空襲に逃げたり隠れたりする余裕はないと思えた。

次々と高度を下げたアメリカの艦載機は飛行場に向かって機銃掃射をしては機首を上げて飛び去った。機関銃の連続した発射音が山々に響いた。同時に爆発の閃光とともに滑走路の周辺に黒煙が垂直に立ち上るのが見えた。数秒後に爆弾が炸裂する雷鳴のような音が山々に轟いた。

青く塗られた艦載機が次々と飛行場に向かって急降下をし、機銃掃射とともに爆弾を投下しては再び高度を上げる攻撃が、何度も何度も執拗に繰り返された。飛行場には次々と新たな土煙が立ち昇り、たなびく黒い煙に野島や夏島の姿もかき消された。

攻撃を終えた艦載機は近くの海上を航行する小型船に攻撃の矛先を変えていた。小型船の周囲の海面には、機銃掃射の水煙が何度も上がっていた。

奈津はこの攻撃を呆然と見ていた。それは、奈津が初めて見る戦争の姿だった。飛行機の爆音、爆弾の炸裂音と土煙、地上で燃える飛行機、それが自然を背景に行われていた。

空の所々に高射砲弾の爆発した黒煙がたなびいていたが、戦いは一方的だった。十数分もするとその黒い集団は南に向かって飛び去っていった。夏島と野島の間の数カ所で、燃え上がる黒煙はいつまでもたなびき、まもなく風に流された。飛行機が飛び去り、戦いが終わると、再び自然はゆっくりと悠久とした本来の姿に戻っていた。

・・・

昭和二十年二月に横浜海軍航空隊は正式に解散し、…

「ドイツもイタリアも降伏した。日本のような小国は、戦争で完全に勝つことは決してない。日清・日露戦争にしろ、日本は最初から英米の仲裁を期待していた。この戦争のようなこけ脅しはいつまで続けられるものではない。明治の日本人はまだそのことを知っていた。弱小国の日本は、列強に押し潰されまいと必死に戦い、戦いが有利なときに講和に持ってゆくしか勝つ道はないのだ。そのような苦しかった状況を今の政治家や軍人は忘れ

ている。日米交渉が決裂して日本は戦争に突き進んだが、戦争を交渉解決の最後の手段と考えていることがそもそも誤っていた。自分の持つ巨大になった軍事力を過信したのだ。戦争は最後の手段ではない、単なる一つの手段で、戦争によって問題が解決する訳ではない。身に過ぎた過大な軍隊を持ったがために日本は悪夢に取り憑かれたのだろう。

頼みの綱の軍隊も既に壊滅して、もう玉砕や特攻しか戦う術がなくなっているのに、まだ戦争をやめようとしな。神風が必ず吹き、本土決戦では一億人が総玉砕するまで戦って英米軍を壊滅させるなどと国民を煽り立てて、自分たちが間違っていることを決して認めようとはしない。負けを認めるだけの度量がないのだ。誰もが失敗の責任を取る気がないからヤケクソになっているだけだ。もう完全に打ちのめされるのを待つしかない」父が独り言のように話したが家族の誰も返す言葉はなかった。

「そうですねと」母が気のない相槌を打っていた。

九、横浜海軍航空隊：横浜市の根岸湾に設立された海軍の航空隊で、南洋の飛行場がない島礁地域での戦闘に備えて水上飛行艇のみから編成された航空隊。

二十七、海軍航空技術廠：昭和七年に横須賀市迫浜に海軍工廠から独立して設立された航空機開発拠点。新技術の研究・開発や実用機の製造も行ってた。空技廠と呼ばれる。

~~~~~

本の紹介として、「短く消滅した日本海軍初の飛行艇部隊「横浜海軍航空隊」。その知られざる活躍と、隊員たちの生き様を、見守り続けた女性の視点で感動的に描いた本格歴史小説。」と書かれている。

要旨

横浜の語学専門学校に進学した奈津は、叔母に頼まれた見合い写真を持って、横浜海軍航空隊の飛行艇の操縦手となった従兄の元を訪ねた。だが昭和17年、従兄の操縦する飛行艇は南洋を哨戒飛行中、敵爆撃機の編隊から友軍の輸送船団を守るために単機で奮戦し、郷里に新妻を残したままマーシャル諸島に散った。奈津にそれを知らせたのは、従兄の友人で元民間航空会社のパイロットの朽木だった。昭和20年になると、本土への空襲は激化し、横浜も絨毯爆撃にあう。奈津は焼け野原で、はじめて戦争の本当の姿を知る。8月15日の日本敗戦から数日後、朽木は終戦の連絡のため、ボロボロになった九七式飛行艇で宅間湾から飛び立った。奈津は、必ず帰ってくると約束した朽木の飛行艇を、赤いパラソルをさして岸壁から見送る。

小川 賢/オガワ マサル

出身地香川県。横浜市在住。大阪府立大学工学部卒。

電力会社に就職し、主に研究所で新エネルギー開発に従事。

海外作品の翻訳作品を中心に、チェコの作家フランツ・カフカの作品やイタリアの作家パヴェーゼの作品を愛読した。

自らの文芸活動としては同人誌・電子出版に「雪蛭」、幻冬舎「暗闇の逃避」を発刊。